

鹿大のチカラ

KAGOSHIMA UNIVERSITY

法文学部

「鹿児島では方言調査に行くたび、新しい発見と驚きがあった」

木部暢子教授（国語学）は、1988年4月に助教として鹿児島大に赴任してから20年間に、奄美など離島を始め県内各地で方言を研究してきた。2006年4月からは鹿大初の女性学部長として法文学部長に。「北九州市出身ですが、自分はこの先ずっと鹿児島にいたい」という。

鹿児島弁研究

木部暢子 教授(54)



移ることが決まった。

国連教育科学文化機関（ユネスコ）は昨年2月、世界で約2500の言語が消滅の危機にあると発表。国内ではアイヌ語が「極めて深刻」、沖縄の八重山語、与那国語が「重大な危険」とされた。県内でも奄美語が「危険」と分類された。

国語研究所ではこうした言葉を調査し、記録・保存する仕事が行っている。自ら調査に赴くとともに、各地の研究者を束ねる役割も担う。

鹿児島に赴任してすぐころ、独特の語り口の鹿児島弁の聞き取りに手を焼いた。「なぜそんな風になったのかを明らかにしたい」と思った。同じ鹿児

江戸時代に独特の変化



島々を巡り方言の聞き取りをする木部暢子教授

島でも地域によつての違いもあり、南北600キロと言われる県内を調査のため駆け回った。「ほとんどの離島に行きまじった」

鹿児島弁の聞き取りが難しいのは、今の日本語のベースになった昔の京言葉からの発音の変化が、他の地域の方言よりも激しいからだという。「首をクツと言ったり、紙をカンと言った

り……」鹿児島には方言を研究するうえで、他地域にはない宝がある。江戸時代にロシアで世界初の辞典を作ったといわれる薩摩出身の青年「ゴンザ」が残した資料だ。

それによると、1720年代、都が江戸に移って100年ちよつとこのころの鹿児島弁では、音の変化はまだ少ししか進んでいないことが分かるという。「受け入れた中央の言葉は鍋でぐつぐつと煮込んで鹿児島風に味付けしたのは、江戸時代のようにです」

一方、鹿児島弁が他の地域にないような音の変化をした可能性として、「大和朝廷により中央の言葉が伝わる前に、単人族が話していた言葉の特徴が遺伝子として残っているということかも知れない……」。なぜは依然として残るが、鹿児島弁の特徴はほかにもみえてきた。

「鹿児島弁は、室町時代ぐらゐの単語をよく保存している。豆腐を『おかべ』と言つのは室町時代の宮中の言葉です」。木部教授が好きなのが「ゆさいも」という言葉。夕方を意味し、万葉集などにも出てくる「夕去り」という言葉からきている。「調査を始めた20年前にはまだ言う人がいましたが、最近あまり聞かなくなりまじった」と木部教授は惜しむ。

「地域の言葉は地域の文化や生活を反映している。鹿児島の人は方言に自信を持っていると思う」

29日午後4時10分から、鹿大郡元キャンパスの法文103号教室で「お別れ特別講義」が予定されている。「最初は演題を『方言の魅力』にしようかと思いましたが、『方言研究の魅力』にしようと思っています」。学ぶ喜びを後進に伝え、新天地に旅立つ。